

サー・トマス・マロリー「ガレスの物語」における 騎士になることの意味*

長谷川千春 (大東文化大学外国語学部)

Chivalry Without Status:

Becoming an Arthurian Knight in Malory's 'The Tale of Sir Gareth'

Chiharu HASEGAWA

Summary

This paper explores the way in which Gareth in Sir Thomas Malory's *Le Morte Darthur* shows his sheer determination to become an Arthurian knight by achieving triumphs over the enemies without any help, preference, authority and family bonds. When coming to Arthur's court, Gareth conceals the fact that he has a noble family, disguising himself as a kitchen boy. Having endured Lyonet's scornful words, Gareth maintains his lofty attitudes towards not only Lyonet but also his enemies during the quest. Gareth's camouflage paradoxically suggests how Arthurian knights are bound to knightly societal norms, regulations and obligations. By intentionally taking an unusual step to becoming officially knighted, Gareth eventually marries lady Lyonesse happily. Malory's 'The Tale of Sir Gareth' portrays the individual chivalric demeanour by showcasing the protagonist's nameless exploit. Gareth's attempt to become incognito is not an attempt to offend the Arthurian system but to challenge the knightly establishment.

* 本稿は平成23年(西暦2011年)6月18日に中央大学多摩キャンパスにて開催された日本中世英語英文学会東支部第27回研究発表会での発表「Maloryの*The Tale of Gareth*における騎士になることの意味」の原稿に加筆・修正を加えたものである。

はじめに

サー・トマス・マロリー (Sir Thomas Malory, 1416年頃～1471年) の『アーサー王の死』 (*Le Morte Darthur*, 1469年～1470年) は、中世アーサー王伝説を英語の散文で描いた作品である。現在出版されている中世イギリス文学入門書でも、マロリーの項目が設けられ、『アーサー王の死』の紹介がされている。¹ 『アーサー王の死』は、アーサーの生い立ち、活躍、アーサー王宮廷の崩壊までを描いた物語であるが、その中には、魔術師マーリンの予言やアーサーへの助言、ガウェイン・ランスロットなどアーサー王宮廷の円卓の騎士の活躍、ランスロットと王妃グィネヴィアの密通、聖杯探求など、様々なエピソードが組み込まれている。物語の中では騎士たちの武勇・信頼関係が描かれる一方で、騎士の冒険の失敗、貴婦人との恋愛、三角関係、裏切りなどの要素も含まれている。このことから、単にアーサー王や騎士たちの武勇伝をまとめたものが『アーサー王の死』ではなく、職務と恋愛との板挟み状態で悩む心理や、失恋の後狂気に至る騎士の様子が赤裸々に描かれていることもこの作品の特徴の一つとされる。

様々な面から読むことが可能な『アーサー王の死』であるが、「ガレスの物語」でしばしば議論に挙がるのが、物語の主題である。この物語が『アーサー王の死』中盤へさしかかる場所に位置するということで、アーサー王宮廷の繁栄を象徴するという研究が行われ、これを基軸に様々な見解が研究者たちによって探究されてきた。² たとえば Elizabeth Edwards は、「ガレスの物語」がロマンスの物語形式をとり、主人公ガレスの幸せな結末を描いたものであるとしながら、次のような見解を示している：

The 'Tale of Gareth' is about fulfilment: of generic expectation, of all the potential of the *matière*, of all Gareth's desires. It is about due process; as Gareth exceeds all the requirements of proper knightliness, so events oblige him by turning out happily.³

Edwards が述べるように、ガレスは 'proper knightliness' に卓越した騎士、つまり騎士として求められる要素を体現する騎士であり、これが「ガレスの物語」の結末を幸せなものとしているのである。確かに『アーサー王の死』でしばしば描かれる騎士道という規律に縛られた騎士社会の不条理・矛盾、またこれが原因で生ずる騎士の葛藤・苦悩・失敗などは「ガレスの物語」においては顕著に表れることはない。基本的に「ガレスの物語」が騎士の成長の過程を肯定的に、そして魅力

¹ 加藤誉子「サー・トマス・マロリー」『中世イギリス文学入門：研究と文献案内』高宮利行、松田隆美編（雄松堂、2008年）、pp. 233-44.

² Wilfred L. Guerin, "The Tale of Gareth": The Chivalric Flowering', in *Malory's Originality: A Critical Study of Le Morte Darthur*, ed. by R. M. Lumiansky (New York: Arno Press, 1979), pp. 99-117.

³ Elizabeth Edwards, *The Genesis of Narrative in Malory's Morte Darthur* (Cambridge: D. S. Brewer, 2001), p. 51.

的に描いているということに関しては、研究者の間ではある程度の合意が得られていると言えよう。

そして、「ガレスの物語」において研究の対象となるのは、主人公ガレスの行動規範である。冒頭部分で、主人公ガレスが高貴な生まれを隠し、匿名の騎士として同行する乙女に罵倒されながら冒険に出立し成功を収める、という物語形式は、中世ヨーロッパで流布していた 'Fair Unknown' 「名無しの美男子」の物語の形式と同様である。このように同様な物語はありながら、「ガレスの物語」と一致する源泉は未だに確認されていない。⁴ ガレスの行動規範は、他の名無しの騎士の物語のそれと同様に扱われることが多いが、Edmund Reiss は、ガレスが冒険で何を重要視しているかについて興味深い視点を提供している。Reiss はまず 'Fair Unknown' の項目を設け、そこでマロリーの理想の騎士の一人としてガレスを中心に取り上げ、彼の行動に関係する 'nobility' という感覚について言及している。ここで Reiss は、本当の 'nobility' とは受動的に受け継がれるものなのか、それとも積極的に達成すべきものなのかという問題を提起して、これをガレスの行動原理と関連付け、次のように主張している：

Gareth has inherited nobility, but he keeps this fact hidden so as to prove himself and to be accepted for himself as knight in his own right and not as son of Lot and brother of Gawain.⁵

以上の引用にあるように、Reiss は、生まれの良さを受け継いだガレスが、血縁者に頼ることなく騎士になったということを証明する為に正体を隠す、ということを強調している。ガレスには、アーサー王物語の中でも頻繁に登場する兄のガウェインがいる。ガレスは「ガレスの物語」以外のエピソードにおいては、ガウェインに比べれば、それほど多く登場することはないが、『アーサー王の死』作品全体において、ガウェインの家系は強力な血縁関係があることで描かれることが多い。この親戚関係の中で、Reiss が言うような縁故によってではなくガレス自身の 'own right' によって騎士としての存在価値を認められようとする姿勢がガレスの道徳律として色濃く表れているのである。

このようにガレスの行動原理や「ガレスの物語」自体の主題や研究者の見解を踏まえ、本稿では、ガレスが騎士になる前にわざわざ卑しい身分に身をやつし、台所で下働きし、生活をするとい

⁴ Ralph Norris は最近の研究において、「ガレスの物語」がマロリー独自のものとする説に疑問を呈し、12世紀後半フランスのクレティアン・ド・トロワ (Chrétien de Troyes) 『荷車の騎士ランスロット』 (*Lancelot: The Knight of the Cart*) や『散文ランスロット』 (*Prose Lancelot*) をマロリーが用いたと論じている: 'Another Source for Malory's "Tale of Sir Gareth"', in *Arthurian Literature XXXII*, ed. by Elizabeth Archibald and David F. Johnson (Cambridge: D. S. Brewer, 2015), pp. 59-74.

⁵ Edmund Reiss, *Sir Thomas Malory* (New York: Twayne, 1966), p. 100. Jeanne Drewes も同様に 'remaining nameless allows a knight freedom within the hierarchical society to reassert his position and thus maintain the power that is one with the name.' と述べ、騎士が名無しの状態であることと階級社会との関連に関して論じている: 'The Sense of Hidden Identity in Malory's *Morte Darthur*', in *Sir Thomas Malory: Views and Re-views*, ed. by D. Thomas Hanks Jr. (New York: AMS Press, 1992), p. 23.

う経験までして自分の正体を隠そうとする行動原理に着目し、さらにその行動原理がガレス自身の意志決定に関わっていることを分析する。そして、アーサー王宮廷の騎士であるが故に生じる連帯責任に触れ、ガレスがそのような問題から正体を隠すことによって逃げずに問題を解決していくことについて議論していく。また、正体を隠そうとするも結局正体が明らかになるガレスと結婚についても考察を加える。

1. ガレスの行動原理：匿名性と自由意思

「ガレスの物語」の冒頭で特徴的に描かれているのは、主人公ガレスの登場と彼の正体を隠す方法である。ガレスは、二人の男の肩に寄り掛からなければ立ってもいられないという状態で宮廷にやってきて、自分の正体は明かさず、一年間宮廷で飲食をさせてもらいたいと発言する。アーサーは寛大にもこの願いを叶えようとするが、アーサー王の執事としての役割をする騎士ケイは *I undirtake he is a vylayne borne, and never woll make man, for and he had be com of jantyllmen, he wolde have axed horse and armour, but as he is, so he askyth.*⁶ と言っている。ここではガレスが正体不明の状態で行ってきたこと、宮廷で飲食を請うことなどから、ケイがガレスのことを 'vylayne borne' と判断し、高貴な生まれであれば馬や鎧などを欲するだろうと、宮廷を守る立場の騎士として警戒心を表している。ケイとして、王の前にやってきて名を名乗らない男を疑うのはごく自然である。ケイの発言が宮廷の警備上当然のものであると同時に、騎士社会の固定観念に縛られたものであると捉えることもできる。ケイは、騎士であれば、身分相応の身なりをし、飲食ではなく、武具が必要だと考えているが、ガレスはこのようなことは必要としていない。むしろ、ガレスはあえて騎士世界の社会通念上の考え方から逸脱した言動をしている、というのが「ガレスの物語」冒頭場面の重要な意味である。アーサー王宮廷に登場する時、ガレスは高貴な生まれのものとしての特権的な立場や他者からの敬意、そして彼自身の誇りを保持することから脱却し、自ら進んで宮廷の騎士たちから軽蔑されるように演じているのである。

また、主人公ガレスの宮廷の台所で働くという経験も「ガレスの物語」における特筆すべきものである。⁷ ケイがガレスを、馬の世話や、衣裳係、給仕の仕事、小姓としての仕事、農業従事、料理

⁶ Thomas Malory, *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. by Eugène Vinaver, 3rd edn, rev. by P. J. C. Field, 3 vols (Oxford: Clarendon, 1990), pp. 294-95. 以下このテキストからの引用は、本文中にかっこ内でページ番号を記す。

⁷ ガレスが台所での生活を受け入れるということに関して、Kenneth Hodges は、ガレスが名誉を得ようとするよりも、自ら進んで下層階級の役割を担おうとすることで、彼が最終的に得ることになる栄光をより偉大なものにしていく、と主張している：*Forging Chivalric Communities in Malory's Le Morte Darthur* (New York: Palgrave, 2005), p. 80. また、中英語ロマンス『ハヴェロック』(*Havelok*) において主人公ハヴェロックが台所で下働きの経験することから、「ガレスの物語」に最も類似している、とする論考もある：Dhira Mahoney, 'Malory's Tale of Gareth and the Comedy of Class', *The Arthurian Yearbook 1* (1999), 165-93. さらに Helen Phillips は、ガレスの騎士と台所の下働きという二重の立場について着目し、この立場の関係性と社会的対立関係に関して論じている：'Bewmaynes: The Threat from the Kitchen', in *Arthurian Literature XXVIII*, ed. by David Clark and Kate McClune (Cambridge: D. S. Brewer, 2011), pp. 39-56. このように「ガレスの物語」においては、主人公の台所の経験がしばしば議論的となる。

番の仕事でもなく、台所で生活させることをアーサー王に提案する。ケイの提案通り、ガレスは宮廷の台所で下働きをしながら生活することになる。これに加えて、宮廷に助けを求めに来た乙女ライネットは、ガレスを身分の低い男だと考え、ガレスのことを罵倒し、'kitchen knave' や 'kitchen page' と呼ぶ。ガレスの立派な体格と見た目から、アーサー王やランスロットはガレスのことを高貴な生まれと推測するが、ガレスは台所で一年もの間生活することによって、本当は高貴な自分の生まれ育ちを隠し続けることに成功している。さらに、ガレスが正体を隠し、kitchen knave などの呼び名を得ることで、アーサー王宮廷の騎士という肩書を持たずとも自分の意志で冒険に出立する機会を得ることが可能になっている。アーサー王宮廷に助けを求めに来たものの、どこの誰を助ければいいのかという情報を詳しく伝えようとしないライネットに対し、アーサー王は、自分の騎士をその冒険には出立させられないと、ライネットの要求を断る。王としては、宮廷を守るという重要な役割を与えられている騎士に、行先も正体もわからない乙女の責任を負わせ、安易に危険な目にあわせたくはないのである。この時点でガレスは台所で働きながら生活していたため、重要な騎士として認識されているわけでもないゆえ、アーサーから冒険の出立を認められる。この部分に、宮廷の騎士が王の庇護により守られている状況で、大義名分がある場合にのみ冒険が許可される、というアーサー王宮廷における冒険出立の条件が暗示されているのである。

計画通りに冒険に出立することができたガレスと、彼に随行するライネットとの関係もガレスの行動原理をよく示している。ガレスは冒険を行う上で、どんなことがあろうともライネットについて行くという極めて強い執着心を表しているのである。ライネットがガレスの台所での経験を罵倒するのに対して、ガレスは次のように返答する：

Damesell, [...] sey to me what ye woll, yet woll nat I go fro you whatsomever ye sey, for I have undirtake to kynge Arthure for to encheve your adventure, and so shall I fynysssh hit to the ende, other ellys I shall dye therefore. (300)

ここで強調されているように、ガレスはアーサーから冒険を許されたことを引き合いに出し、死を覚悟してまでライネットとの冒険の達成を目指そうとしている。ところがライネットは、冒険を共にしようとするガレスに対し、彼とは同行したくなく、むしろ彼を追い払いたい気持ちを示す。ライネットが 'I sey hit for thyne avayle, for yett mayste thou turne ayen with thy worshyp' (302) と言っているように、ガレスには途中で冒険から逃げ出すという選択肢がある。さらにガレスはアーサー王宮廷の騎士としてこの冒険を成功するように任命されたわけでもない。つまりガレスにはこの冒険を果たす義理もなければ、責任もないのである。しかしながら、ガレスは、ライネットの誹謗に耐え、自分の意志で冒険を続けることを力説し、実行し続ける。Dorsey Armstrong は、ガレスが正体を隠すことによって生まれる状況について次のような見解を述べている：

Gareth's calculated deception of the court creates the circumstances that will allow him to

establish a knightly reputation free from any hint of preference or partiality due to his kinship with the king.⁸

Armstrongが指摘するように、ガレスは王の血縁関係から生ずる依怙最賔から騎士としての評判を得ることを避けているのである。自分の名前を明らかにした上で冒険に出立することができれば、公式にアーサー王宮廷の騎士として冒険の成功を収めて、自分の名声を高める、という手順を踏むことになる。ただこれを行うと、ガレスにとって、アーサー王の血縁関係があることで騎士に任ぜられた、という事実が残ることとなる。この状況下で冒険に成功したとしても、自分自身の栄光のみならず、ガレスの家系の名誉も含まれることとなる。このことから、ガレスがアーサー王の騎士に任命されると、‘preference’や‘partiality’を無効化した名声を築くことが不可能となる。そこでArmstrongの言うような‘calculated deception’を用いて、つまり、本来アーサー王宮廷の騎士として迎えらるべきであるにも関わらず、台所で働き身分を偽り、騎士社会における自分自身の高貴さを隠した上で、純然たる騎士としての名声を積み上げていくことがガレスの行動原理となっているのである。

2. アーサー王の騎士であるか否か：忠誠心と連帯責任

ところが、ガレスは正体を隠すということを徹底する中で、必要に応じて、他者に正体を明かすこともある。ガレスが正体を明かす唯一のアーサー王の騎士は、ランスロットであり、ガレスは、ランスロットにわざわざ宮廷の外で騎士に叙任されている。このように、公式にはガレスがアーサー王宮廷の騎士ではない状態を保持しておくことによって、アーサー王宮廷の規律や行動規範からは縛られない状態を可能にしていることがわかる。つまり、アーサー王宮廷の騎士道理想に従わなければならないという義務からは、遠ざかった場所に自分を置いている。ただし、ガレスはアーサー王宮廷の騎士道理念からは距離を置きつつも、アーサー王宮廷の騎士道理想を尊重し、自分自身で騎士としての理想を体現しようとしているというのが重要な点である。

まず、ガレスは度重なる戦いにおいて、負けることもなければ、卑怯な手を使うこともない。ガレスの生まれつきの性質についてBarbara Nolanは‘From the start, he is physically and morally strong *and* he belongs to a noble family.’⁹と、ガレスが最初から肉体的にも道徳的にも優れている貴人である、ということを指摘している。このように、ガレスは、一年間台所で生活をした後、まるで騎士の英才教育を受けていたかのように、馬に乗り、武具を扱い、敵対者に勝利を収め、また、

⁸ Dorsey Armstrong, ‘Forest and Recall: Gareth and Tristram’, in *Gender and the Chivalric Community in Malory’s Morte d’Arthur* (Gainesville: University Press of Florida, 2003), pp. 110-143 (p.115).

⁹ Barbara Nolan, ‘The Tale of Sir Gareth and The Tale of Sir Lancelot’, in *A Companion to Malory*, ed. by Elizabeth Archibald and A.S.G. Edwards (Cambridge: D.S. Brewer, 1996), pp. 153-82 (p.158).

命乞いをするものには必ず慈悲を与えている。¹⁰ ガレスは台所の労働者として身分を偽るものの、台所での生活中は性格までも品性に欠くことはない。むしろ、台所でも周りから信頼された様子が描かれているのである。従って、ガレスの力量・性格描写は台所での生活から、冒険中でも優れているものとして描かれている。

次に、ガレスの心理に葛藤がないというのも「ガレスの物語」の興味深い点として挙がる。ガレスを慰めるために、ガレスとの試合に負けた藍色の騎士パーサントは自分の娘をガレスの寝床に送る。この娘は服を脱いだ状態でガレスのベッドに入るが、ガレスは、この娘と寝床を共にすることに強い拒絶反応を示し、娘にベッドから出るように指示する。ガレスはこの後、'I were a shamefull knyght and I wolde do youre fadir ony dysworschyp' (315) と、自分がもし娘と肉体関係を持てしまえば恥さらしとなるところだった、と反省している。これにとどまらず、マロリーは、ガレスから徹底的に女性との肉体関係を排除させる。冒険に成功した後ガレスは、ライオネスとやっとのことで想いを通じ合わせ、肉体関係を持とうとするが、その時にライネットに命じられた騎士がやってきて、ガレスを襲う。さらに、ガレスが襲ってきた騎士の首を斬り落としても、さらには、頭を粉々に砕いても、ライネットが軟膏を塗ることでこの騎士の体を修復する。この行動から、ライネットに超自然的な要素を読み取ることができると同時に、強引な手法を用いても、ガレスとライオネスとの結婚する前の肉体関係の描写が避けられているのである。¹¹

このように強制的とは言え、ガレスが女性関係に深入りしないことから、ガレスが肉欲や愛を優先してしまい、自信の栄光やアーサー王への忠誠心を忘れることはない。Beverly Kennedy はガレスの忠誠心について次のように説明している：

The Tale of Gareth is a fitting conclusion to Malory's composite portrait of the True knight, for Gareth is able to honour all three of the traditional knightly loyalties—to his God, to his king, and to his lady—because he has resolved the conflicts among them.¹²

Kennedy が 'traditional knightly loyalties' として挙げている三つの忠誠心の対象 (God, king, lady) がしばしば騎士を混乱させる主要な原因となっている。まずマロリーの『アーサー王の死』において、神に忠実な騎士であることが極めて重要である。そして、騎士としてアーサー王に忠誠心を示すことも義務である。さらに、騎士としての必要不可欠な忠誠を示す対象として貴婦人がいる。このような複数の忠誠心を表さなければならないという状況の中、苦悩し、結果失敗する騎士

¹⁰ クレティアン・ド・トロワの『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』(*Perceval, the Story of the Grail*) において、主人公ペルスヴァルは冒頭部分では無知で、粗野な少年である。ペルスヴァルと比べると、ガレスの既に成長した様子が明らかとなる。

¹¹ ガレスとは異なり、『アーサー王の死』において結婚前に女性と肉体関係を持つ騎士は多い。たとえば、ガウェインはエタード婦人と、ペリノア王はアリーズの妻と、ランスロットはエレーンと、トリストラムはセグリワデス婦人と、アーサーはリオノルスとロット王妃と肉体関係を持っている。

¹² Beverly Kennedy, *Knighthood in the Morte Darthur* (Woodbridge: D. S. Brewer, 1985), p. 146.

が魅力的に描かれるのもアーサー王文学の深淵たる所以であるとも言える。ただ Kennedy の主張として、「ガレスの物語」においては、忠誠心の対象が多数存在することによって生ずる騎士の葛藤という問題は解決しているのである。従って、ガレスは、忠誠心を示すバランスを失い、失敗をするということはない。この観点から比較してみると、王妃グィネヴィアへの愛を最優先してしまうランスロットや、血縁者、または聖杯探求への興味を最優先するガウェインとは異り、あくまで忠誠心の対象はアーサー王だということを前提としているガレスの様子を読み取ることができる。

直接関係がなくとも敵対者が現れることも、アーサー王の騎士としての宿命である。ライネットの仕える貴婦人ライオネスの城を包囲する、赤の国の赤の騎士は、長い間、アーサー王宮廷にとつての敵対者であり、40人ほどの騎士たちを殺し、木に吊り下げるという残酷な行為を行っていた。ガレスとの激戦の末、打ち負かされた赤の騎士は、命乞いをしながら、昔愛した貴婦人の兄弟がランスロットかガウェインに殺されて、その復讐のためにアーサー王宮廷の騎士たちにむごい死に方をさせ続けてきた、と説明する。その後に赤の騎士は以下のように続ける：

And she prayed me as I loved hir hertely that I wolde make hir a promyse by the faythe of my knyghthode for to laboure in armys dayly untyll that I had mette with one of them, and all that I myght overcom I sholde put them to vylans deth. And so I ensured her to do all the vylany unto Arthurs knyghtes, and that I sholde take vengeaunce uppon all these knyghtes. (325)

このように、赤の騎士は、アーサー王の騎士に復讐を果たすことを自分の愛した貴婦人に約束していたのである。この引用から、ランスロットかガウェインというアーサー王宮廷の有力な騎士が一人を殺したということで、アーサー王と宮廷に所属する騎士に対する敵意や復讐心が生まれるということが明らかになっている。アーサー王の宮廷に所属するということで、連帯責任が生じ、宮廷に所属する騎士が他の騎士にまで影響していくこととなるのである。赤の騎士がガレスに敵対心を示したのも、アーサー王宮廷の騎士の連帯性からくるものであったが、ガレスはこれに関しても自らの武勇で解決する。

このように、自分の行動が宮廷の規律に影響し、当事者でなくとも恨まれるという例を見ることで、アーサー王宮廷の騎士団に属する騎士であるがゆえの重責を読み取ることができる。しかしながらガレスは、このような連帯責任を無視し、責務から巧みに逃れようとしているのではなく、むしろ、自らを律し、責任感を持ち、敵愾心を持った相手に果敢に挑戦していき、復讐心や敵意をアーサー王への忠誠心に昇華させていくのである。

3. 正体の判明と騎士の結婚

自分を匿名の状態にしておきつつ直面する問題を解決していく中で、ガレスは自分の正体を完全

には隠し切ることができない。ガレスの正体が明らかになることに、ガレスと冒険を共にしてきたライネット、冒険に従者として従っていた小人、そしてガレスの母親モーゴース、以上三人が関わっている。アーサー王宮廷でモーゴースは、立派な鎧兜・十分な金銭を与えてガレスをアーサー王のもとに送ったということを明かす。このことで結局、ガレスの正体がアーサー王宮廷に明らかになる。アーサー王は、敵対していた騎士たちが次々に仲間になる為に宮廷にやってくる様子を見て、このような偉業を行っている騎士が誰か気になっていた。そして、ついにガレスの捜索が始まったのである。自分が探されていることを察知していたガレスはライオネスに、大規模な馬上試合を提案させる。そこでガレスは、自分の居場所を明らかにしないで欲しいとしつつもライオネスに試合の褒美に関して次のように伝えさせる：

than may ye say this is your avyse, that and hit lyke his good grace, ye woll do make a cry ayenst the Assumpcion of Oure Lady, that what knyght that prevyth hym beste, he shal welde you and all your lande. (341)

ここには、ガレスが試合の褒美としてライオネスを得ようとする気持ちが強く表れている。それと同時に、自分ではアーサー王宮廷に正体を知られたくないとしながら、自らアーサー王宮廷の騎士たちと試合をすることによって武勇を証明し、その後でライオネスと結ばれるという手続きをわざわざ踏もうとしていることが読み取れる。このような状況で、試合中にほぼ正体が明らかになり、ガレスの思い通りには事は運ばないが、ガレスはライオネスとの幸せな結婚を迎えることとなる。ガレスの結婚は自分自身の意志で追及してきた理想の騎士像の最終形態とも言える。

その一方で、今までアーサー王宮廷に対してはあえて匿名であり続けたガレスにとっては、正体が明白となったことで、無名であった時とは異なった状況に置かれることになる。アーサーと対面し、ガレスはライオネスのことを誰よりも愛していると告白し、また、ライオネスはアーサー王に ‘wete you well he is my fyrste love, and he shall be the laste; and yf ye woll suffir hym to have his wyll and fre choyse, I dare say he woll have me.’ (359-60) と、ガレスへの思いを伝える。この言葉はライオネスがガレスのことを愛していることがよく表れていて、さらにライオネスがガレスの ‘wyll’ と ‘fre choyse’ を尊重したうえで、ガレスと結婚するということを強調しているのが読み取れる。¹³ ガレスが結婚するということが、二人の祝宴に多くの騎士が従者を従えやってくる。この騎士たちも、ガレスと同様に、自分たちの意志を尊重していることも「ガレスの物語」終盤の興味深い点である。ガレスに服従を誓い、いつでもアーサー王のもとへ駆けつけると約束した緑の騎士・赤の騎士・ルース公・赤のアイアンサイドは、それぞれ、祝宴の場で、式部官、召使頭、給仕頭、ワイン給仕、肉切り役をさせてもらいたいと自ら願い出ている。Dhira Mahoney はこ

¹³ Karen Cherewatuk は、この部分を 15 世紀の女性と結婚、そして教会法と関連付けて論じている：‘Pledging Troth in Malory’s “Tale of Sir Gareth”, in *Marriage, Adultery, and Inheritance in Malory’s Morte Darthur* (Cambridge: D. S. Brewer, 2006), pp. 1-23 (p. 20).

これらの仕事を 'hierarchically increasing offices'¹⁴ と述べ、当時の階級社会の中で重要な役割を果たしていたことに言及しているが、彼らがそのような役目を負う義務はなく、自分の意志でガレスに対する奉仕を行おうとしているのである。まさにこの行動こそが、ガレスが匿名の騎士としてアーサー王に示し続けてきたことだった。

騎士にとって結婚は、幸せを象徴する一方で、危険を伴う戦いからは身を引かざるを得ないということを感じさせることもある。ガレスとライオネスの祝宴において、食卓であらゆる種類の食料が用意され、吟遊詩人の吟唱が行われ、様々な余興が演じられるという、物語の結末の楽しい様子子が描かれる中で、馬上槍試合の様子を説明するマロリーは、結婚した騎士の状態が変化していることを明らかにしている：

Also there was grete justys three dayes, but the kynge wolde nat suffir sir Gareth to juste, because of his new bryde; for [...] that dame Lyonesse desyred of the kynge that none that were wedded sholde juste at that feste. (362)

ここには、ライオネスの意向によって、危険を伴う試合参加を控えさせられているガレスの様子が示されている。結婚するまでは危険を顧みず、敵対する騎士たちと戦い続けてきたが、馬上槍試合という中世時代の騎士にとってのスポーツにおいて、ガレスの出場機会が制限されているのである。さらに、これはガレスの意思ではなく、彼の妻であるライオネスが望んだことという点も重要である。Maureen Fries が指摘しているように、『アーサー王の死』の中では、未婚の騎士の活躍が中心となり、結婚した騎士は、表舞台から姿を消していくこととなる。¹⁵ ガレスが匿名で積み上げてきた名声・活躍は、ガレスの正体の判明とライオネスとの結婚によって幕を閉じることとなった。

おわりに

アーサー王宮廷の騎士に叙任されるためには、家柄、血縁、育ちの良さが必要不可欠な要素であり、騎士道の華とも表現されるアーサー王宮廷の騎士になることは、名誉なことでもあり、騎士にとって誇るべきことである。ただし、騎士になった後には、難しい任務を任せられるという危険、騎士道に悖る行為をしてはいけないという制約、失敗をすれば宮廷全体に影響する、という責任が生じるのは言うまでもない。マロリーの「ガレスの物語」においてガレスは正体を隠し、敢えて公の場でアーサー王宮廷の騎士にならないことで、規制や行動原則からは縛られていない状態にいることに成功している。ただ、これは自分の意志で冒険を選び、さらには模範となる騎士の行動規範

¹⁴ Mahoney, p. 174.

¹⁵ Maureen Fries, 'How Many Roads to Camelot: The Married Knight in Malory', in *Culture and the King: The Social Implications of the Arthurian Legend*, ed. by Martin B. Shichman and Lames P. Carley (Albany: University of New York Press, 1994), pp. 196-207.

を自ら体現していくための準備段階だということが「ガレスの物語」の着目すべき部分である。このような段階を意識的に踏んでまでガレスは、アーサー王宮廷に優れた騎士を仲間入りさせ、宮廷の発展に貢献し続けることによって、宮廷に名誉をもたらしたのである。ガレスは、アーサー王を中心とした、宮廷の興味を自分に引き寄せ、自分を探させ、宮廷に招かれるということで、宮廷からも尊敬され、結果的に英雄視されることとなる。最終的に結婚することで騎士としての活躍は控えざるをえない状況になるが、もうここには宮廷の台所で下働きをし、乙女ライネットに罵られながら冒険していたガレスの様子を確認することはできない。

マロリーは「ガレスの物語」を『アーサー王の死』の中に組み込むことによって、ガレスという理想の騎士像を効果的に描き出した。騎士道という複雑で矛盾もはらんだ騎士の行動規範を追及する中で、それを完全に体現することができない騎士たちとは対照をなし、宮廷を尊重しつつも自分の意志で騎士道を追及し、理想の騎士像を体現する結婚までの過程を描いた物語、それこそが「ガレスの物語」なのである。

参考文献

第一次資料

- Grafenberg, Wirnt von, *Wigalois: The Knight of Fortune's Wheel*, trans. by L. W. Thomas (Lincoln: University of Nebraska Press, 1977)
- Havelok*, ed. by G. V. Smithers (Oxford: Clarendon, 1987)
- Ipomadon*, ed. by Rhiannon Purie (Oxford: Oxford University Press, 2001)
- Lacy, Norris J., ed., *Lancelot-Grail: The Old French Arthurian Vulgate and Post-Vulgate in Translation*, 5 vols (New York: Garland, 1993-96)
- Lybeaus Desconus*, ed. by M. Mills (London: Oxford University Press, 1969)
- Malory, Thomas, *The Works of Sir Thomas Malory*, ed. by Eugène Vinaver, 3rd edn, rev. by P. J. C. Field, 3 vols (Oxford: Clarendon, 1990)
- Sands, Donald B., ed., *Middle English Verse Romances* (Exeter: University of Exeter Press, 1986)
- Troyes, Chrétien de, *Arthurian Romances*, trans. by William W. Kibler (London: Penguin, 1991)

第二次資料

- Ackerman, Felicia Nimue, "Your Charge is to me a Plesure": Manipulation, Gareth, Lynet, and Malory', *Arthuriana*, 19.3 (2009), 8-14
- Armstrong, Dorsey, 'Forest and Recall: Gareth and Tristram', in *Gender and the Chivalric Community in Malory's Morte d'Arthur*, Dorsey Armstrong (Gainesville: University Press of Florida, 2003), pp. 110-143
- Bliss, Jane, *Naming and Namelessness in Medieval Romance* (Cambridge: D. S. Brewer, 2008)
- Cherewatuk, Karen, 'Pledging Troth in Malory's "Tale of Sir Gareth"', in *Marriage, Adultery, and*

- Inheritance in Malory's Morte Darthur*, Karen Cherewatuk (Cambridge: D. S. Brewer, 2006), pp. 1-23
- Drewes, Jeanne, 'The Sense of Hidden Identity in Malory's *Morte Darthur*', in *Sir Thomas Malory: Views and Re-views*, ed. by D. Thomas Hanks Jr (New York: AMS Press, 1992), pp. 7-23
- Edwards, Elizabeth, *The Genesis of Narrative in Malory's Morte Darthur* (Cambridge: D. S. Brewer, 2001)
- Farge, Catherine La, 'Blood and Love in Malory's *Morte Darthur*', in *A Companion to Medieval English Literature and Culture c.1350-c.1500*, ed. by Peter Brown (Malden: Blackwell, 2007), pp. 634-47
- Field, P. J. C., 'The Source of Malory's *Tale of Gareth*', in *Aspects of Malory*, ed. by Toshiyuki Takamiya and Derek Brewer (Cambridge: D. S. Brewer, 1981), pp. 57-70
- Guerin, Wilfred L, "'The Tale of Gareth" : The Chivalric Flowering', in *Malory's Originality: A Critical Study of Le Morte Darthur*, ed. by R. M. Lumiansky (New York: Arno Press, 1979), pp. 99-117.
- Henisch, Bridget Ann, *Fast and Feast: Food in Medieval Society*, (University Park: Pennsylvania State University Press, 1976)
- Hodges, Kenneth, *Forging Chivalric Communities in Malory's Le Morte Darthur* (New York: Palgrave, 2005)
- Hoffman, Donald L, 'Malory's "Cinderella Knights" and the Notion of Adventure', *Philological Quarterly*, 67 (1988), 145-56
- Huber, Emily Rebekah, "'Delyver Me My Dwarf!": Gareth's Dwarf and Chivalric Identity', *Arthuriana*, 16 (2006), 49-53
- Kennedy, Beverly, *Knighthood in the Morte Darthur* (Woodbridge: D. S. Brewer, 1985)
- Larrington, Carlyne, 'Sibling Relations in Malory's *Morte Darthur*', in *Arthurian Literature XXVIII*, ed. by David Clark and Kate McClune (Cambridge: D. S. Brewer, 2011), pp. 57-74
- Loomis, R. S, 'Malory's Beaumains', *PMLA*, 54 (1939), 656-68
- Lyons, Faith, 'Malory's *Tale of Gareth* and French Arthurian Tradition', in *The Changing Face of Arthurian Romance: Essays on Arthurian Prose Romances in Memory of Cedric E. Pickford*, ed. by Alison Adams and others (Cambridge: D. S. Brewer, 1986), pp. 137-50
- Mahoney, Dhira, 'Malory's Tale of Gareth and the Comedy of Class', *The Arthurian Yearbook*, 1 (1999), 165-93
- Naughton, Ryan, 'Peace, Justice and Retinue-Building in Malory's "The Tale of Sir Gareth of Orkney"', in *Arthurian Literature XXIX*, ed. by Elizabeth Archibald and David F. Johnson (Cambridge: D. S. Brewer, 2012), pp. 143-60.

- Nolan, Barbara, 'The Tale of Sir Gareth and The Tale of Sir Lancelot', in *A Companion to Malory*, ed. by Elizabeth Archibald and A.S.G. Edwards (Cambridge: D.S. Brewer, 1996), pp. 153-82
- Norris, Ralph, 'Another Source for Malory's "Tale of Sir Gareth"', in *Arthurian Literature XXXII*, ed. by Elizabeth Archibald and David F. Johnson (Cambridge: D. S. Brewer, 2015), pp. 59-74
- Phillips, Helen, 'Bewmaynes: The Threat from the Kitchen', in *Arthurian Literature XXVIII*, ed. by David Clark and Kate McClune (Cambridge: D. S. Brewer, 2011), pp. 39-56
- Pigg, Daniel F, 'Caught in the Act: Malory's "Sir Gareth" and the Construction of Sexual Performance', in *Sexuality in the Middle Ages and Early Modern Times: New Approaches to a Fundamental Cultural-historical and Literary-anthropological Theme*, ed. by Albrecht Classen (Berlin: Gruyter, 2008), pp. 633-47
- Reiss, Edmund, *Sir Thomas Malory* (New York: Twayne, 1966)
- Ruff, Joseph R, 'Malory's Gareth and Fifteenth-century Chivalry', in *Chivalric Literature: Essays on Relations between Literature and Life in the Middle Ages*, ed. by Larry D. Benson and John Leyerle (Toronto: University of Toronto Press, 1980), pp. 101-16
- Wilson, R. H., 'The Fair Unknown in Malory', *PMLA*, 58 (1943), 1-21
- Wright, Thomas L., 'On the Genesis of Malory's Gareth', *Speculum*, 57 (1982), 569-82
- 加藤誉子「サー・トマス・マロリー」『中世イギリス文学入門：研究と文献案内』高宮利行、松田隆美編（雄松堂、2008年）、pp. 233-44
- 清水阿や「理想の騎士—ゲイレス卿」『東京学芸大学紀要第二部門』21（1970）、51-60
- 白井英充子「騎士ガレスが象徴するもの」『A λ η θ ε ι α』（アレーティア）10（1994）、21-37
- 高宮利行「Maloryの'Tale of Gareth'—その超自然的人物について」『藝文研究』32.2（1973）、146-70
- 、「Maloryの'Tale of Gareth'—その構造・意味・性格描写」『藝文研究』34.2（1975）、113-26

（2016年9月28日受理）